

伝承講演会

宝井派で聴く

武士道

9月16日(土)、めぐろパーシモンホール小ホールにて、講演協会宝井琴桜、宝井琴星、宝井琴鶴、宝井梅湯、宝井小琴による講演会を開催しました。



(出所：文化庁
文化デジタルライブラリー)
<https://www2.nijiac.go.jp/>
dqlib/



其の式

講釈師、見てきたような嘘をつき「パン、パン、パン、パン」

張り扇で釈台をたたき、調子よくメリハリをつけて語ります。「講談」は何よりもそのリズムが命です。リズムミカルな話芸の妙味によって、どんな荒唐無稽なお話でも嘘いつわりのない本当の出来事のように思わせてしまいます。講釈師見てきたような嘘をつき「講釈師扇で嘘をたたき出し」とは昔からよく使われる言葉です。嘘のことも本当にしてしまふ話芸のマジック。そこにこそ講談最大の魅力があるのです。

其の参

黄門様も講談が本家本元

「この紋所が目に入らぬか！」今でもドラマで人気者の水戸黄門。もともと江戸時代に「黄門漫遊記」のタイトルが講談で扱われたことが人気を得たきっかけです。以来、実際には旅行などめったになかった黄門様はスパースターの道を歩き始めました。その他、大岡越前、国定忠治、柳生十兵衛、清水次郎長など映画、テレビのヒーローたちの活躍も講談が生みの親といえます。いわば講談は話の宝庫。度高座をお聞きになれば話の収集家になれること間違いありません。

(出所：講演協会ホームページ)

<https://kodankyokai.jp/>



講談とは？

おもに歴史にちなんだ物語を
読み聞かせる芸

講談はおもに武将や偉人の物語など、歴史にちなんだ話を、座つて二人で読み聞かせる芸です。釈台という机を前に置き、戦物語を讀むときはその上に本をのせて読み進みます。和紙で作った張り扇というもので釈台をたたいて、読む調子を助けたりもします。特に戦いの場面では「修羅場」という、リズムミカルな読み方をするのが特徴です。現在では観客の好みに合わせて、さまざまな演目に加え

られ、外国の物語も演じられています。また、現代が舞台となるなど、新しい演目も生まれています。

歴史に学ぶものから

話芸を楽しむものへと変化

軍談などを通じて、歴史から教訓を学ぶことを目的としていたものが話芸を楽しむものへと変化していったのは、江戸時代半ばから後期にかけてのことです。軍談のような堅い歴史ものだけでなく、世相風俗を描く分かりやすい内容のものも演じられるようになりました。明治になると講談から歌舞伎の題材となる演目も生まれます。また、政治を批判する講談を専門に読む講談師も現れました。

出演者と演目

宝井琴桜

徳川家康「鯉の御意見」

天下取りは、殿に意見する家臣があつたればこそ



秋田県横手市生まれ。講演協会常任理事。1975年女性初の真打となる。「瓜生岩子伝」「日本女医誕生記」「平塚らいてう伝」など、助成の偉人伝を数多く創作し口演、好評を得ている。

宝井琴星

謡曲より「義経佐藤館」

源義経の一行は奥州への道中、佐藤館にて忠臣の老婆に接待を受ける



神奈川県横浜市生まれ。講演協会理事・事務局長。1985年真打昇進。時代ものから現代の世相を反映したものまで多くの新作講談を創作し、その面白さには定評がある。

宝井梅湯

加賀騒動より「服部と稲垣の武士気質」

加賀前田六代目藩主の頃、お家横領を企む大槻伝蔵が暗躍する…



山形県生まれ。2010年2月宝井琴梅に入門。古き良き読み物を現代に甦らせ、後世に残すべく毎月軍談読み、連続物の勉強会を開催、年間250席近くの高座をこなしている。来春真打昇格予定。



太閤記より「明智左馬之介 湖水渡り」

山崎合戦の敗軍の将、武士の散り際とはいかに

講演協会所属真打。神奈川県横浜市生まれ。2019年10月14日、真打昇進し、五代目宝井琴鶴を襲名。持ちネタは、「塚原卜伝」「三方ヶ原軍記」など約150席。各寄席や地域寄席、演芸会、各種イベントに出演中。

講談を楽しむ 3つのポイント

其の壹
「講談」と「落語」は
どう違うの？

「講談」「落語」はことあることに比較されています。その違いはいったいどこにあるのでしょうか。簡単に言ってしまうえば「落語」が会話によって成り立つ芸であるのに対し、「講談」は話を読む芸という言い方ができます。もちろん、読むといつても単なる朗読とは違い、独特の調子と小道具の使い方、展開されるわけなのです。よく使われる小道具として優実なのが張り扇と釈台です。張り扇で釈台をパンパンという音を響かせて調子よく語ります。この小道具を巧みに使った芸こそ「講談」ならではのものです。また、「講談」は「落語」と比較して歴史が古く、奈良平安の頃にその原型が見られます。ただし、一般によく知られる「講談」のはじまりは「太平記読み」とされています。食に困った浪人が老若男女を集めて「太平記」を読んで聞かせたというものです。これが「講談」のルーツです。

琴鶴さんの 小道具解説

今回「初めて講談を観た」という方が結構いて、張り扇の迫力に驚いた方もいたようです。琴鶴さんに講談の小道具について伺いました。

— 講談では落語とは違う小道具をお使いです。どのようなものなのでしょう？

張り扇という小道具を打ちながら語るのが一般的です。代わりに拍子木という小さな木片を用いる人もいます。話によって使い分ける場合も。反対側には白扇を置き、合の手として叩いたり、所作などに用います。



— どのようなタイミングでお使いになるのでしょうか？

話に緩急をつける効果的な演出として、または場面転換に用います。「呼吸」「間」といった感覚を重視し、同じ演目でも、その日のお客様との呼吸場の空気感により、叩き

方は変化します。即興性のあるジャズに通じる感覚かもしれません。

— 講談師の方はそれぞれ自身のお持ちになられているのですか？

各講談師が手作りします。芯は、日舞用の扇子を割ったものや、竹を細く切ったものと厚紙を用います。周りの和紙は西ノ内という銘柄が多い。宝井梅湯さんのYouTubeチャンネルでも、張り扇の制作を公開しています。

— ありがとうございます。最後に読者に一言お願いします。

宝井一門とひと口に言いますが、各人の芸風の違い、特徴も感じていただけたかと思えます。難しく感じる言葉遣いも、聴き慣れば心地よくなることも。今回を入口として、どうぞまた、講談に親しんで頂けましたら幸いです。

今回、当財団として初めて講演会を単独で開催しました。お客様も初めてご覧になった方が多かったようですが、ぜひまた観たい、次回開催を期待との声もたくさんいただきました。今後も歴史伝承の観点から講談を広めていきたいと考えています。最後に、ご協力いただいた目黒区芸術文化振興財団、講演協会の皆さんにお礼申し上げます。